

祖先祭祀と家族・序論

上野和男

- 一 問題
- 二 祖先祭祀研究の動向
- 三 祖先祭祀研究の条件
- 四 家族の構造と祖先祭祀

論文要旨

最近とくに一九七〇年代以降、社会人類学・日本民俗学・社会学・宗教学などにおいて祖先祭祀研究が極めて活発に行われるようになってきた。一九七〇年以前の研究はフォーテス・M.のアフリカ研究がそうであったように、単系出自集団と祖先祭祀との関係であった。日本においてもこの時期の研究は、単系出自集団である同族組織や家と祖先祭祀の研究が中心であったが、一九七〇年以降の研究は、単系出自集団以外の親族組織と祖先祭祀との関係に関心があつてきた。

こうした活発な祖先祭祀研究を促進させてきた条件の第一は、「仏壇ブーム」や「墓ブーム」に象徴されるように、日本社会が今日祖先祭祀をどのように遂行するかについて一種の社会問題的状况が見られることである。第二は、戦後の日本の家族の変化をどう評価するかが家族研究者への課題になってきたことであり、この問題への接近にあたって祖先祭祀研究が大きな意味を持ち得ると考えられることである。第三は昭和初期に本格的に開始された

日本の家族・親族の実証的研究において、長い間家族は労働組織すなわち経済的な単位として研究されてきたのに対して、いま儀礼的祭祀の側面からの家族研究によって、あらたな家族研究の展開が求められていることである。

現在の祖先祭祀研究、とりわけこの共同研究「家族・親族と先祖祭祀」にはつぎのような課題が課せられていると考えられる。第一は日本の祖先祭祀の地域的な変差がまず明らかにされるべきである。第二は日本の祖先祭祀の長期的・短期的変化が明らかにされるべきである。第三は祖先祭祀の諸形態が日本人の死者観、他界観とどうかかわっているかが明らかにされるべきである。第四は東アジアにおける日本の祖先祭祀の位置が明らかにされるべきである。これらを通して日本人の基層信仰のひとつとしての祖先祭祀を、現段階において、社会構造と祖先観の両面から総合的に明らかにするのが本共同研究の課題である。

一 問 題

最近とくに一九七〇年代以降において社会人類学・日本民俗学・社会学・宗教学をはじめとして、考古学や歴史学においても祖先祭祀研究がきわめて活発に行われるようになってきた。一九八六年に刊行された森岡清美編『近現代における「家」の変質と宗教』に象徴されるように、最近の祖先祭祀研究の一つの大きな特徴は社会構造、とりわけ家族(家)や親族組織との構造的関連である。本稿は日本におけるこれまでの祖先祭祀研究を社会人類学、日本民俗学、社会学を中心として学史的に検討し、今日の祖先祭祀研究の課題、とりわけこの共同研究「家族・親族と先祖祭祀」の研究課題を具体的に明らかにしようとするものである。⁽¹⁾

一 祖先祭祀研究の動向

(一) 単系親族組織と祖先祭祀

早くから祖先祭祀研究を開始し、もっとも多くの研究を蓄積してきたのは社会人類学であるが、社会人類学の祖先祭祀研究は、一九六〇年代における親族研究の大きな変化に対応して、一九七〇年代から大きく変貌してきたように思われる。一九七〇年以前の祖先祭祀研究を指導してきたのは、イギリスの社会人類学者マイヤー・フォーテスであり、彼の祖先祭祀研究は『祖先崇拜の論理』(一九八〇年)に集約されている。

この中でフォーテスは祖先崇拜の概念、条件、研究方法などについて論じているが、フォーテスの研究の中心はアフリカに典型的にみられる単系出自を基礎とする親族組織と祖先崇拜との関連であった。

フォーテスはまず祖先崇拜を「死者の霊魂が存在して子孫に何らかの影響を及ぼす能力を保持し続けると信じられ、祖先を祭祀する信仰習俗」と規定した上で、祖先崇拜に不可欠な特性として次の二点を指摘している。第一は「先祖としての資格を得るために、死は充分な条件とはいえないが、必要な条件ではある」(フォーテス一九八〇：一六五)という事実である。このことは祖先崇拜が成立するためには人間の「死」が発生することが必要であるが、「死者」が必ずしも「祖先」⁽²⁾として崇拜されるとは限らないという事実を指摘したものであり、また祖先崇拜と死者崇拜との区別の必要性を強調したものである。第二は「先祖たちが単に記念されたり、社会的目的のために利用されるだけでなく、真に崇拜といえるためには、祖先とのかかわりを保つ手段として儀礼が発達していなければならぬ」(フォーテス一九八〇：一六五)ことである。祖先崇拜の儀礼とは祈祷、神酒奉納、供饗その他の行為である。この意味で祖先崇拜は死亡した先祖に向けられた慣習化した信仰や行事から成り立っているとフォーテスは規定したのである。

ここでフォーテスの議論は「祖先」の概念の検討へと進む。祖先が単なる死者でないとすれば、祖先にはどのような条件が必要であろうか。この点についてフォーテスは祖先と子孫との関係に注目して、「祖先として社会的に認められるのは、子孫が生存し、彼らが子孫であることが

明確に認められればこそであるということ、はつきりさせておく必要がある」(フォーテス一九八〇…一六八)とのべたうえで、「祖先としての身分を確保し、祖先崇拜という形で儀礼的奉仕を受けるためには、しかるべく認められた子孫が生存する必要がある、そのための重大な第一歩は、親としての身分を獲得することである」(フォーテス一九八〇…一六九)と指摘している。すなわち祖先崇拜が成立するためには何らかの形で子孫との間に親子関係が成立していることが必要であり、祖先崇拜が親子関係と不可分の関係にあるとフォーテスは強調しているのである。この点についてのフォーテスの結論は以下の通りである。「祖先崇拜は終局的には、親子関係という核をそれぞれの文化がどのように構成するか、そのあり方に根ざしていることになる」(フォーテス一九八〇…一六九)。つまりフォーテスによれば、死者の霊魂が何らかの形で子孫に影響を及ぼすという観念のもとに、死を契機として正当な先祖を正當な子孫が、さまざまな儀礼を通じて祀るのが祖先崇拜なのである。

この結論は祖先崇拜を社会構造との関連で問題にするという、フォーテスの研究方法に明確な基礎を提供したといえよう。祖先崇拜の研究はタイラーが提起したように、これを宗教システムとして研究するか、あるいは社会関係の構造の一樣相として研究するかによって研究方法や概念が大いに異なる³⁾。前者はいわば宗教的アプローチであり、後者は社会的アプローチである。フォーテスはこの二つの方法のなかで社会構造的アプローチを選択したのであり、これが社会人類学の祖先崇拜研究の方法的基礎となったのである。社会構造的アプローチの中心の問題は、

フォーテスが「祖先崇拜が行われているどの社会でも、この信仰が、家族・親族と出自といった社会関係や制度に根ざしているという点には異論はあるまい」(フォーテス一九八〇…一三三)と指摘しているように、祖先崇拜と社会構造、とりわけ家族や親族組織との関連であることはいうまでもない。この方法にもとづいてフォーテスが具体的に研究したのは、タレンシ族やアシャンティ族など、父系にせよ母系にせよ単系出自を基礎とする親族組織における祖先崇拜であった。こうした研究から明らかになったことは、子孫との間に親子関係を設定しえた祖先のすべてが祖先崇拜の対象とはならないという事実である。父系社会では父系出自でむすばれた先祖のみが祖先崇拜の対象であり、母系社会ではこの逆である⁴⁾。結局のところフォーテスの祖先崇拜研究の特徴は当時の親族組織研究がそうであったように、単系出自にもとづく親族組織をもつ社会の祖先崇拜の研究に重点がおかれることになったことである。言葉をかえていえば、単系的な親族組織の構造を明らかにする方法のひとつとして、祖先崇拜の研究が行なわれたのである。

このようなフォーテスの祖先崇拜研究は、その後の社会人類学における祖先祭祀研究を方向づけた先駆的研究であった。その後に展開した社会人類学の祖先祭祀研究はフォーテスが提起したように、祖先祭祀が社会構造と何らかの関連をもつことを基本的な前提にしてきた。とくにフォーテスが関心を集中した祖先崇拜と単系的親族組織との関連の研究は、その後の祖先祭祀研究の中心課題となった。中国の単系親族組織と祖先崇拜を分析した FREEDMAN, M. (一九五八)の研究は、この視点から

の祖先祭祀研究の代表であり、日本においても戦前の農村社会学や家族社会学を中心に単系親族組織である家や同族組織と祖先祭祀との関連を問題にした有賀喜左衛門(一九五九)、中野卓(一九六七)、竹田聰洲(一九五八)、米村昭二(一九七四)などの祖先祭祀研究は、この方向に沿うものであったといえよう。⁽⁵⁾しかしながら、こうした視点からの祖先祭祀研究に対して、祖先祭祀がはたして単系親族組織をもつ社会に固有の現象なのかどうか、単系社会には祖先祭祀が普遍的に存在するのかどうか、また、単系親族組織をもたない社会では祖先祭祀は存在しないのかどうか、存在するとすればどのような特質をもつか、といった問題が提起されるのは当然である。とくに、基本的に単系親族組織をもたない日本のような社会においても活発に祖先祭祀がみられることや、伝統のないし最近の家族の変化によっても妻方母方祖先の祭祀をも行なう形態の祖先祭祀は、フォーテス流の方法では理解できないからである。

(二) 祖先祭祀の多様性

そこで、とくに一九七〇年前後からの日本の社会人類学における祖先祭祀研究は、それまでの家や同族組織との関連での祖先祭祀研究から、より一般的な家族・親族組織と祖先祭祀の研究へと新たな展開を遂げた。その契機となったのは村武精一(一九七〇)の祖先祭祀研究である。この研究は単系親族組織以外の親族組織や家族と祖先祭祀との関連に主たる関心があり、これまでの家や同族と祖先祭祀の研究では見過ごされてさまざまな祖先祭祀形態をとりあげて、日本における祖先祭祀の多様性

を明らかにする方向をめざすものであった。この意味において村武精一(一九七〇)は、祖先祭祀研究の新しい方向を提示したものであった。村武精一(一九七〇)は主として半檀家制(複檀家制)を手がかりとしながら、図1に示すように日本の親子関係の5つのモデルを提示した。第一の父系筋(A)は、子供のすべてを父と同じ寺に帰属させ、婚入者である母はその生家の寺に帰属させる型であり、父系制を強調した型である。第二の並行系筋(B)は、同一家族に複数の旦那寺があり、子供のうち男子は父と同じ寺に、また女子は母と同じ寺、すなわち母の生家の寺に帰属させる型である。この型は男系筋の寺帰属と女系筋の寺帰属が同一家族

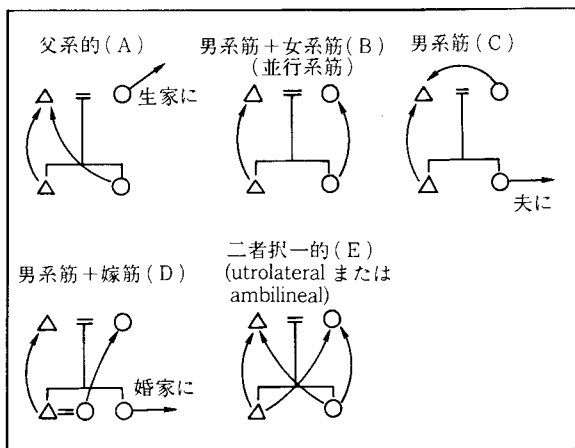


図1 半檀家制にみる日本の親子関係の多様性 (村武精一1970)

内で並行して存在している型である。第三の男系筋(C)は、半檀家制をとらず一家一寺の帰属方式をとるものであって、子供のうち生家に残留して相続した男子は父と同じ寺に帰属し、他家へ婚出した女性は婚家の寺に帰属する型である。また、婚入した嫁は夫と同じ寺に帰属する。この型は家の構造をもっとよく反映した親子関係の型であって、家族全員がひとつの寺に収斂して帰属する型である。第四の男系筋+嫁筋(D)は、子供のうち生家に残留して相続した男子は父と同じ寺に帰属させ、他家へ婚出した女性は婚家の寺に帰属する点では、(C)と同じであるが、婚入した嫁を特定の人(女寺)に帰属させる型である。この型は同一家族が複数の旦那寺をもつ点では(B)と同じであるが、(B)では父―息子、母―娘が同一寺に帰属したのに対し、この型では父―息子、母―嫁が同一寺に帰属するものである。この型もまた家の構造の典型に近いと村武精一は指摘している。第五の二者択一的(E)は、子供たちが両親いずれかの寺への帰属を選択して決定する型である。この型は選択的に決定される点においてこれまでの型と異なる。半檀家制を手がかりにして得られたこの五つのモデルを村武精一は、奄美・沖縄の親族組織や祭祀集団の帰属と比較し、日本と琉球両地域の親族に共通する柔軟な塑性性の存在を指摘している。⁽⁶⁾

こうした村武精一の親子関係の分析は、家の構造に関係する(B)、(D)の型ほかに、日本にはさらに家の構造に関係しない三つの型の親子関係が存在することを明らかにしたとともに、男系筋型の親子関係のみでは日本の親子関係は理解できないことを明らかにしたものである。したが

って祖先祭祀を手がかりとした日本の親子関係についての村武精一の分析は、親子関係との関連において祖先祭祀を分析するという点ではフォーテスと共通しながらも、祖先祭祀が単系的な親子関係以外の親子関係とも関連している事実を指摘した点において、フォーテスの祖先祭祀研究とは異なる視点をもつものといえよう。

村武精一(一九七〇)はその後の日本における祖先祭祀と家族・親族の研究に大きな影響を及ぼした。牛島巖による伊豆利島や奄美与論島の位牌祭祀の研究(牛島巖一九六六、一九七六)、SMITH, R.による現代日本の位牌祭祀の研究(SMITH, R. 一九七四)、上野和男による位牌祭祀や祖名継承法の研究(上野和男一九七八、一九八二、一九八五)などがその代表であり、日本および東アジアの社会人類学的な研究において位牌祭祀を中心とする祖先祭祀の研究がきわめて活発に展開されることになった。単系組織ではない家族や親族組織と祖先祭祀の問題として、一九七五年以降とくにひとつの焦点となったのは、父方の先祖に加えて母方の先祖の位牌や墓を祭祀する、いわば双性的な奄美の祖先祭祀であった。母方先祖の位牌や墓を祭祀するようになったのは過疎化などによる最近の奄美の社会変化によるものであるが、こうした祖先祭祀が奄美における伝統的に双性的な親族組織(ハロウジ)と関連する事実が各地の事例から明らかにされたのである。位牌祭祀を中心とするこうした奄美の祖先祭祀の研究は、しばらくの間、奄美社会の社会人類学的研究の主要テーマを形成した。

(三) 祖先祭祀の変化と地域性

単系親族組織のみならず幅広い家族や親族と祖先祭祀との関連の研究の展開のなかで、現代日本の祖先祭祀の変容に注目したのが SMITH, R. (一九七四)である。SMITH, R. (一九七四)は岩手県、三重県、香川県³⁾の三つの農村における詳細な位牌祭祀調査にもとづいて、位牌祭祀の対象者を分析し、日本人が誰を先祖と考えるかを明らかにした。とくに最近の都市に頻繁に見られるようになった妻方Ⅱ母方親族など直系親族以外の位牌祭祀の出現などから、日本の祖先祭祀が「家族中心の祖先祭祀」(family-centered ancestor worship)から「世帯中心の祖先祭祀」(household-centered ancestor worship)へと変化したと指摘した。つまり、家族の変化とともに遠い先祖を含めて父方の先祖のみを祭祀する形態から、父方先祖のみならず妻方Ⅱ母方先祖をも祭祀する形態へと変化したというのである。また、日本における最近の祖先祭祀の変化として、①祖父母の世代が家族にいないことから、子供たちが先祖の祭祀の実際を見たり教えられたりする機会が少なくなったこと、②イエ観念が戦後急速に衰えたことから、居住単位はもう祖先祭祀の観念的な中心点の役割を果たさなくなってきたこと、③都会に住む夫婦とその子供達の接触する相手として、夫の親族と同時に妻の親族もその対象となるようになり、双系的な相互の付き合いが生まれたことを指摘している。SMITH, R. (一九七四)の議論には日本の家族の変化についての過大な評価や親族関係についての誤解がみられるが、とくに戦後の家族変化に

ともなう祖先祭祀の変動論を提示した点は重要である。³⁾

SMITH, R. (一九七四)とほぼ同じように祖先祭祀の変動を提示したものととして、森岡清美(一九八四、一九八九)、孝本頁(一九七八、一九八六)などの社会学における祖先祭祀の変動論がある。森岡清美は「近現代日本における祖先祭祀の変容を、家の変化との関連で追跡しよう」(森岡清美一九八四、三頁)という視点から、戦後の家族変化に対応する祖先祭祀とその観念の変化を問題とし、「家中心のもの」から「家族中心のもの」へと先祖観が変化したことを明らかにした。この変化を森岡清美は「直接経験したことはおろか間接経験もない遠い先祖まで含む、系譜的な先祖観から、直接経験の範囲内の近親に限る代わり、双系に拡がる先祖観への変化である。また、系譜上の先人であれば選り好みなく含めなければならぬ義務的な先祖観から、追慕愛惜の対象となる近親の個人に限る任意的な先祖観への変化である」(森岡清美一九八四、二二四頁)と要約している。孝本頁(一九七八)もほぼ同様に「系譜的祖先祭祀観」から「縁的祖先祭祀観」への祖先祭祀観の変容を提示している。

社会学における祖先祭祀の研究もまた、とくに一九七〇年前後から活発化してきた。それまでの祖先祭祀研究は有賀喜左衛門(一九五九)に代表されるように「家」や同族と祖先祭祀との関連であったが、この頃より、戦後の日本家族の変動と祖先祭祀との関連が集中するようになった。社会学者の見解によればその背景は、「家」や同族が「解体」し、家族が直系家族から夫婦家族に変化したことと、にもかかわらず祖

先祭祀が消滅しなかったという事実にあるように思われる。単系組織である「家」や同族が解体しても、「家」や同族に固有のものと考えられていた先祖祭祀が存続するという事実は、単系組織以外の家族や親族組織もまた先祖祭祀と関連していること意味している。この点において、社会人類学の一九七〇年以降における祖先祭祀研究がそうであったように、社会学の祖先祭祀研究も、単系組織のみならず幅広く家族や親族組織と先祖祭祀との関連という視点をとることになったのである。家族の変化とパラレルな形で祖先祭祀ないし先祖祭祀観の変化を提示したが、最近の社会学の祖先祭祀研究である。

変動論を重視したこうした社会学の祖先祭祀研究に対して、柳田国男をはじめとする日本民俗学の祖先祭祀研究は日本人の祖先観の特質や地域的特質の解明に関心が集中している。日本民俗学の祖先祭祀研究としてまず注目しなければならないのは柳田国男（一九四六）の研究である。柳田国男（一九四六）は日本人の祖先観の特質として、①死者は死後遠くには行かず子孫の近くに存在すると考えられ、先祖と子孫は頻繁な儀礼的交流をくりかえすこと、②先祖は家を単位として祀られること、③家によって祀るべき先祖が厳格に規定されていること、の三点を指摘した。祖先祭祀と社会構造との関連という視点からみれば、このうち②③がとくに重要である。柳田国男は経済的単位と祭祀的単位の両面から日本の家を明らかにしようとしたが、祖先祭祀の研究は家の構造を祭祀的側面から解明するための重要な視点であった。結局、柳田国男は家を単位として父系先祖のみを排他的に祭祀する形態が日本の祖先祭祀の一

般形態であると主張しているのである。この見解は、日本の家を単一の構造をもつ同質的なものと考え、柳田国男の日本の家族についての見解に対応している。この意味では柳田国男の祖先祭祀研究もまたフォーテスの視点と共通である。柳田国男の祖先祭祀研究のなかでいまひとつ注目すべき理論は、最終年忌などを境として、死者が個性を失って死霊が祖霊へと変化するという祖霊化理論である。

このように柳田国男の祖先祭祀研究が日本の一般的な形態の追及にあつたのに対して、最近の日本民俗学における祖先祭祀研究は、「位牌分け」「オヤジマイ」など地域的に特徴ある祖先祭祀形態に注目して、いわば祖先祭祀の地域的変差を明らかにする方向に研究の焦点が移行している（中込睦子一九八三、小松俊雄一九八三、堀内真一九八四など）。

「位牌わけ」とは両親の位牌祭祀を子供の数にあわせて複数つくり、相続者のみならず分家者や女性婚出者にも親の位牌を分与する形態であり、結果として各家では父系の代々の祖先の位牌にくわえて、女性婚入者の両親の位牌も祭祀するものである。また「オヤジマイ」は両親の葬儀に兄弟姉妹が別々に帳場などを設定して関与する形態である。この二つの祖先祭祀形態は東北方南部から関東、中部地方に分布し、いずれも祖先祭祀を兄弟姉妹間で分散させることによって、相続者に集中させない構造をもつものであり、「家」の原理とはかなり異なる祖先祭祀である。これまでのべてきた社会人類学、社会学、日本民俗学以外の研究分野においても、最近祖先祭祀研究が活発化しているように思われる。とくに歴史学においては、吉田孝（一九八三）による祖名の研究や、義江明

子(一九八六)による古代の氏と祖先祭祀の研究などが注目される。このほかにも中世史、近世史や考古学においても祖先祭祀への関心が高まりつつあるように思われる。

このように最近の動向を中心にして日本の祖先祭祀研究をふりかえってみると、基本的な方向としては、フォーテスが提示した単系親族組織と祖先祭祀の研究から、単系親族組織以外の親族組織をも視野に入れた祖先祭祀研究へと移行しているのが、顕著な傾向であるといえよう。とくに伝統的に単系親族組織を発達してこなかった地域における双系親族組織を基盤とする祖先祭祀や、都市家族の祖先祭祀が注目されたのはこのような背景によるものである。しかしながら幅広い親族組織と祖先祭祀の関連を理論的にどうとらえるかについては二つの方向があるように思われる。ひとつは地域的に特徴ある祖先祭祀形態に注目して、日本の祖先祭祀やその分析をつうじて明らかにされる親子関係の地域的多様性を明らかにする方向であり、いまひとつは家族の変化にもなる祖先祭祀の変化を明らかにする方向である。前者はいわば祖先祭祀の地域性研究であり、後者は祖先祭祀の動態的研究である。社会人類学や日本民俗学の研究は前者により多くの関心があり、社会学の研究はむしろ後者を中心である。したがって現在の日本の祖先祭祀研究は地域性研究と動態的研究の二つの軸を中心に展開されているといえよう。

二二 祖先祭祀研究の条件

一九七〇年以降現在にいたるまで、各分野において祖先祭祀の研究が活発化させた背景や条件について、つぎに検討してみよう。第一は、「仏壇ブーム」や「墓地ブーム」などに象徴されるように、日本社会が今日祖先祭祀をどのように遂行するかについて一種の社会問題的状况が見られることである。つまり日本の現実の家族が祖先祭祀についてさまざまな問題をかかえているという状況である。そうした状況をいくつかあげてみよう。まず最近の新聞でも報道されたような祀り手のいない無縁墓の増加という問題がある(『朝日新聞』一九八五年一〇月一三日)。この報道によれば、東京都の場合、二・三万家族の都営墓地があるが毎年四〇程度の管理料の不払いがあり、一九八〇年からすでに九〇〇件以上の改葬を済ませたという。比較的面積の広い都営墓地の古い区画がいくつかの小区画に分割されて、新しい墓が建立される状況は最近の都営墓地のあちこちで見られる現象である。その要因としては、核家族化や単身赴任家族の増加、海外出張の長期化などがあげられるという。つぎに主婦の墓意識の変化という問題がある。既婚女性一五〇人を対象として調査が行なわれ、最近発表された「調査報告・あなた墓をどうしますか?」(『婦人公論』一九八六年五月号)によれば、夫や姑と同じ墓には入りたくないと考えている主婦がかなり多く、先祖代々墓の「解体」が進行中だという。一五〇人のうち「夫の墓に入りたくない」という意思表示を

したのは実に三八人にのぼるといふ。この中には「夫は夫の墓にはいつてほしいが、自分はいりたくない」と考えている女性と、「自分は夫の生家の墓にはいりたくないのでも夫にもいらぬでほしい」と考えている女性に分化しているようである。夫の墓にはいりたくない理由として、姑と同じ墓にはいることを拒否する意見が強いようだ。ある女性は「だって私はあの人達（夫の両親と義兄夫婦）とは他人でしょう。主人は次男ですし、私は成瀬の家のヨメに来たんじゃありません。はつきりいって、私、あの人達は好きになれないんです」とのべているという。この調査は今後、家族単位に超世代的に死者を同一の墓に埋葬してきた家族墓形態の崩壊に至るかどうかは別としても、女性の墓意識にかなりの変化が生まれつつあることを示唆しているといえよう。さらに最近複数家族墓の急速に増加していることも注目されなければならない。ここで複数家族墓とよぶのは、同一区画内に複数の家族の墓が建立される形態の墓や、同じ石塔に複数の家族名が書かれる形態の墓のことである。いずれの場合にも複数の家族で同一墓地を形成する形態である。最近の東京の都営墓地ではこうした形態の墓地がかなり確認されるし、奄美の墓地にはこれがきわめて多い。同一石塔の左右や上下に「○○家の墓」「○○家の墓」とならべられて記載されている墓はその典型である。これは婚姻によって結ばれた複数の家族が祀り手その他の事情で墓を共通にするものであるが、かつてはこうした墓はみられなかったものであり、最近の家族の変化がこうした墓地形態を出現させたと考えられる。こうした祖先祭祀をめぐる社会問題的状况は、つまり、日本人が最近の状況

変化のなかで、あらためて祖先祭祀をどうするかを決定しなければならぬ事態に直面していることを象徴しているものといえよう。

第二は、戦後の日本の家族の変化をどう理解するかが家族研究者への課題になってきたことであり、この問題への接近にあたって祖先祭祀研究が大きな意味を持ちうると思われることである。周知のように戦後とくに一九六〇年代から一九七〇年代において、家族規模の縮小と家族構成の単純化つまり核家族化が急速に進行したが、こうした核家族化によって「家」が全くなってしまうのかどうか、言葉をかえていえば制度的に日本の家族が直系家族から夫婦家族に変化するのかどうかの理解の問題である。この問題についても、変動論と伝統論（地域性論）とはつねに対立する見解を提示してきた。変動したと見る見解と、伝統的な家族の地域性は変化していないと見る見解の対立である。国勢調査の結果をみると、たしかに一九六〇年以降、核家族的世帯や単純世帯の比率は増加し、逆に拡大家族的世帯は急激に減少しているが、拡大家族的世帯（核家族的世帯もより複雑な構成の家族）の絶対数はこの間にあってもむしろ増加している。この事態をどう見るかの問題なのである。またこうした家族の変化ののちにあっても、新しい核家族をふくむ多くの家族において位牌を祀る仏壇や先祖棚が供えられているし（高橋博子一九七五参照）、墓地を持たない新設世帯でも徐々に近郊に墓地を購入し始めている。「仏壇ブーム」や「墓地ブーム」の主たる担い手はこうした核家族であることは疑いない。こうした状況は「家」とよばれてきた直系家族がもってきた制度を現在の核家族もかなりの程度継承している

ことを示している。⁽⁸⁾これは核家族化が「家」を全面的に否定した上に進行しているとは思えない状況でもあるといえる。こうした事態をどう理解するかが第二の問題である。

第三は、昭和初期に本格的に開始された日本の家族・親族の実証的研究において、長い間家族は労働組織すなわち経済的な単位として研究されてきたのに対して、いま儀礼的祭祀的側面からの家族研究によって、あらたな家族研究の展開が求められていることである。とくに最近の家族の変化を、制度的な直系家族から夫婦家族の変化として確認できるかどうかは、儀礼的祭祀的単位としての家族の研究に期待される問題である。経済的単位としての家族の研究が主として家族成員間の力学的な関係、つまり夫婦関係と親子関係の強調のありかたの解明にふさわしいに對して、儀礼的祭祀的単位としての家族研究は、家族の論理、すなわち家族イデオロギーの解明に適しているといえる。儀礼的祭祀的側面からの家族研究の中心をなすのは、祖先祭祀の研究である。祖先祭祀をつうじて明らかになると期待されるのは、親子関係のありかたの問題、つまりどのような先祖を先祖と考えるか、あるいは家の構造に直接かわる親子関係の連続性をどう考えるかの問題である。

四 家族の構造と祖先祭祀

現在において、祖先祭祀研究を内的的に促進している条件として、以上に示した三つが最も重要であるが、こうした条件をうけて今後、祖

先祭祀と家族・親族との関連について研究をすすめる場合、基本的にどのような問題があるかをここで二、三検討してみよう。

まず、祖先祭祀と社会構造の関連性については、これに疑問を提起する研究者もあり、また祖先祭祀のさまざまな問題が社会構造との関連のみでは理解しえないことは当然であるが、祖先祭祀と家族・親族を議論する場合には、この両者の関連は一応の方法論的前提として必要である。なぜならフォーテスが指摘したように、祖先祭祀の問題は親子関係に深くかわっており、特定の低位世代の子孫が特定の上位世代の先祖を祭祀するのが祖先祭祀であるからである。しかしながらどのような上位世代の先祖を祭祀するかについては、フォーテスが問題にした単系的に關係づけられる先祖のみならず、双系的にも關係づけられる先祖を含めて議論されるべきである。つまり、単系親族組織を基盤とする祖先祭祀のみならず、それ以外の親族組織を基盤とする祖先祭祀についても問題にすべきであり、今後むしろ集中的に研究されるべき問題は、単系組織以外の親族組織を基盤とする祖先祭祀の解明にある。

また、こうした方法論的前提で研究をすすめる場合、重要なのは祖先祭祀の単位はなにかという問題である。これは祖先祭祀の基本単位が家族なのか、それとも親族組織なのかという問題である。祖先祭祀が活発におこなわれている地域は世界的にみて、日本をはじめとする東アジア、東南アジア、アフリカなどであるが、東アジアのなかでも日本では家族を基本単位として祖先祭祀がおこなわれているのに対して、中国や朝鮮半島では家族単位の祖先祭祀は無視できないとしても、祖先祭祀の基本

単位は門中、同族、宗族などの父系リニージ（単系親族組織）であり、祖先祭祀の基本単位の差異は明確である。日本の場合、家族のある種の集合体である同族組織によって祖先祭祀がおこなわれることもあるが、柳田国男が日本の祖先祭祀の単位を「家」と規定し、また鈴木栄太郎（一九四〇）が、「家族本位制」と日本を規定したように、日本社会の基本単位は家族であり、祖先祭祀の基本単位もまた家族である。アフリカの場合はフォーテスが分析したように祖先祭祀の基本単位は単系親族組織である。こうした社会による祖先祭祀の基本単位の差異は、具体的には村武精一（一九七〇）が分析するように婚出（入）女性の祖先祭祀の差などとして問題となる。祖先祭祀の比較研究を試みる場合、こうした基本単位の問題を無視することはできないのである。

さらに、祖先祭祀と家族の関連を考える場合、フォーテスがアフリカで提示したように、また村武精一（一九七〇）が日本と琉球について分析を試みたように、祖先祭祀を通じてあきらかになるのは、主として親子関係の構造であり、家族や親族関係としてこのほかに重要な夫婦関係や兄弟姉妹関係は祖先祭祀の研究のみでは充分に明らかにならないことが考慮されなければならない。したがって親子関係、夫婦関係、兄弟姉妹関係を総体としてその構造を問題にするためには、隠居制、相続継承、分家制度、婚姻体系などの家族制度の研究もあわせて行うことが必要である。このことはすでに問題を提起した、戦後日本の家族が制度的に直系家族から夫婦家族へと変化したかどうかの問題、言葉をかえていえば、夫婦関係の重要性が親子関係を凌ぐまでに至ったかの問題についても同

様である。

最後に、現在の祖先祭祀研究、とりわけこの共同研究「家族・親族と祖先祭祀」の研究課題について検討してみたいと思う。祖先祭祀の研究動向からもあきらかなように、これまでの祖先祭祀研究のなかで、社会人類学や日本民俗学の研究は日本における祖先祭祀の多様性、とりわけ地域的な多様性の研究に多くの関心を集中させてきた。これに対して社会学的研究は、戦後における家族の変化にともなう祖先祭祀の動態に焦点をあてて研究がすすめられる傾向があった。また歴史学や考古学の研究はさらに長期的な祖先祭祀の変化に関心があるように思われる。このような研究状況にあって、現在の祖先祭祀研究、とりわけこの共同研究「家族・親族と祖先祭祀」にはつぎのような課題が課せられていると考えられる。

まず第一に、日本の祖先祭祀の地域的な変差がまず明らかにされるべきであり、さらに祖先祭祀の地域性がそれぞれの地域の家族・親族組織とどう関連しているかが明らかにされるべきである。柳田国男の祖先祭祀研究はすでにのべたように、日本の祖先祭祀の一般的特質の解明にむけられてきたが、柳田国男がモデルとした祖先祭祀形態は日本の祖先祭祀の一つのモデルにすぎないとすれば、祖先祭祀の地域性についてさらに研究を深める必要がある。その場合の手がかりとなるのは、一方では「位牌分け」「分牌祭祀」「オヤジマイ」「総墓」「年齢階梯制墓制」など地域的に特徴ある祖先祭祀のさまざまな形態であり、他方では都市の核家族、ないし賃労働者家族の祖先祭祀である。祖先祭祀と家族の関連を、

家族や親族組織を独立変数、祖先祭祀を従属変数とすれば、大間知篤三(一九五〇)や蒲生正男(一九八二)をはじめとして多くの研究者が提示してきた家族や親族組織の地域的類型の存在は、それに適合する祖先祭祀の地域的類型の存在を予想させるものである。このことがまず明らかにされなければならない。

第二に、日本の祖先祭祀の長期的・短期的変化が明らかにされるべきである。日本の祖先祭祀が基本的に家族を単位として成立していると考えれば、父方先祖を中心とした祖先祭祀形態の形成は、家の成立の問題とふかいかかわってくることになる。また明治以降近代において日本の祖先祭祀がどのように変化したか、とくに新宗教や商家同族組織における祖先祭祀がどのような構造をもつかがあきらかにされなければならない。さらに戦後における祖先祭祀の変化の実態が家族の変化との関連でいっそう明らかにされるべきである。

第三に、祖先祭祀の諸形態が日本人の死者観、他界観とどうかかわっているかが明らかにされるべきである。さしあたって考えられる問題としては、柳田国男の提起した祖霊化過程の問題、とくに死霊と祖霊の類別と関係の問題をつうじて、「祖先とはなにか」が具体的に解明されるべきである。この問題には父方先祖のみならず母方・妻方先祖の祭祀の問題も当然ふくまれるべきである。

第四に、東アジアにおける日本の祖先祭祀の位置があきらかにされなければならない。このためには中国、台湾、朝鮮半島の祖先祭祀との比較研究が必要であり、比較にあたっては、すでにのべたように祖先祭祀

の基本単位の検討もあわせておこなわれるべきである。

これらを通して日本人の基層信仰のひとつとしての祖先祭祀を、現段階において社会構造と祖先観の両面から総合的に明らかにするのが本共同研究の課題である。日本社会は祖先祭祀の地域性を明らかにするためにも、また祖先祭祀の歴史的变化を明らかにするためにきわめて恵まれたフィールドである。これまで日本の祖先祭祀については、それぞれの分野で個別的に研究がすすめられてきたが、この共同研究をつうじて、日本というフィールドの共通の資料をもとに、社会人類学、社会学、日本民俗学、歴史学、考古学の活発な学際的研究が展開されることを期待したいと思う。

註

(1) 本稿は一九八六年五月三〇日に行なわれた共同研究「家族・親族と祖先祭祀」第1回研究会における報告「祖先祭祀と家族・序論」に若干の加除訂正を加えたものである。のちにのべるように本稿を「祖先祭祀と家」ではなく、「祖先祭祀と家族」としたのは、単系の親族組織のみならず、ひろく家族・親族と祖先祭祀との関連を問題としたいという目的にもとづいている。

(2) 本稿においては「先祖」「祖先」は互換的な用語として用いることにする。したがって「先祖祭祀」「祖先祭祀」も同義として用いる。民俗語彙としてはセンゾムカエ、センゾオクリ、センゾユズリ(先祖代々受け継がれている田畑のこと)のように、「先祖」が用いられ、「祖先」が民俗語彙として用いられることはないように思われる。

(3) 祖先崇拜の二つの研究方法についてフォーテスはつぎのように述べている。「祖先崇拜は、もっぱら、崇教的信仰と慣行のシステムとして、つまり、死や他界、霊魂や幽霊などの力についての諸概念、そして祈禱や供儀の儀礼についての信念や教義を決定的要素とする宗教的システムとして、

考察されるべきなのであろうか。それとも祖先崇拜は、主として、当該社会の、とりわけ家レベルでの、社会関係の構造の——タイラーの用語を用いれば、「延長」——なのだろうか(フォーテス一九八〇、一六四頁)。

(4) フォーテスは、祖先が母系先祖のみに限定される母系アシヤンティ社会について、「祖先崇拜はこの社会において法的に社会関係や行動を、政治組織の制裁をバックに規制する親族・出自構造の領域に属する事柄であって、倫理的・心情的思慮に基づいて行動が規制される父子関係の領域とは全く別だからである」とのべている(フォーテス一九八〇、一四三頁)。

(5) 一九六七年五月六日におこなわれた日本民族学会第六回研究会シンポジウム「祖先観と社会構造」は祖先祭祀と単系親族組織との関連を中心の課題としたシンポジウムであり、フォーテスの視点による祖先祭祀研究の一応の総括の意味をもつシンポジウムであった。このシンポジウムでも祖先観と社会構造とは基本的に関連するのかわという問題に疑問を提示した研究者もあった。

(6) 村武精一(一九七〇)は親子関係の塑性性の分析のなかで、descentの概念を問題とし、「descent」の概念を、周知のようにA. R. Radcliffe-BrownやM. Fortesらの如く、明確な単系親族集団への成員権資格をあらわすことのみ限定して用いるわけにはいかなくなりません(村武精一九七〇、一三二頁)とのべて、社会人類学におけるdescent概念の変更を提起している。

(7) たとえばSMITH, R.は家族の変化について「過去三〇年ほどの間に、家はその度の局面から見ても完全に崩壊してしまい、その遺制さえもそういつまでも生き続けるとは考えられなく」(SMITH, R. 一九七四、二二〇頁)と分析しているが、これは余りにも過大な家族変化の記述であり、祖父母の世代を含む家族はきわめて多数存在している。また妻の親族との交際を最近の変化とする見解は、日本の親族組織についての全くの誤解にもとづいている。さらにSMITH, R.のとりあげた日本の位牌祭祀はごく標準的な位牌祭祀に限定されており、「位牌分け」「分牌祭祀」など地域的に特徴ある位牌祭祀形態を問題にしない点も限界がある。

(8) 中野卓(一九五八)は「家」をつぎのように概念規定している。「家産にもとづき家業を経営し、家計をともし、家の先祖を祀り、家政の単位

または家連合の単位となる制度体」(中野卓一九五八、五一頁)。ここでも祖先の祭祀は家制度の重要な機能としてとらえられている。

参考文献

- 有賀喜左衛門(一九五九)「日本における先祖の観念—家の系譜と家の本末の系譜と—」岡田謙・喜多野清一編『家—その構造分析—』一一二頁
- FORRES, M. (一九六五) Some Reflections on Ancestor Worship in Africa, in *African systems of thought*,
- FORRES, M. (一九六六) An Introductory Commentary, in *Ancestors* ed. by W. H. Newell, pp. 一—一六.
- フォーテス、マイヤー(田中真砂子訳)(一九八〇)『祖先崇拜の論理』、ベリカン社
- FREEDMAN, M. (一九五七) *Lineage Organization in Southeastern China*, London
- FREEDMAN, M. (一九六六) *Chinese lineage and Society-Fuian and Kwangtung*, London, Athlone Press (田村克己・瀬川昌久「中国の宗族と社会」一九八七年)
- 箱山貴太郎(一九七三)「位牌分けについて」『日本民俗学』八五、四八—五三頁
- 箱山貴太郎(一九八〇)「位牌分け」『講座日本の民俗』二、一八六—一九九頁
- 堀内 真(一九八四)「山梨県下のオヤシマイ・シュウトムライ」『日本民俗学』一五〇、三六一—五一頁
- 蒲生正男(一九八二)「日本の伝統的社会構造とその変化について」『政経論叢』五〇巻五/六号、二二—四三頁
- 小松俊雄(一九八三)「オヤシマイ習俗—栃木県の八溝山系を中心に—」『日本民俗学』一四五、二七—四四頁
- 孝本 貢(一九七八)「都市家族における祖先祭祀観—系譜的先祖祭祀観から縁の先祖祭祀観へ—」『現代宗教への視角』、一〇—二二頁
- 孝本 貢(一九八六)「現代日本における祖先祭祀の研究課題」『近現代における「家」の変質と宗教』、五—三二頁
- 森岡清美編(一九八六)『近現代における「家」の変質と宗教』、新地書房
- 森岡清美(一九八四)『家の変質と先祖の祭』、日本基督教団出版局

- 森岡清美(一九八九)「家族の変貌と先祖祭祀」『講座家族心理学』一、八二—一〇〇頁
- 村武精一(一九七〇)「口疏祖先祭祀からみた系譜関係の塑性性—いわゆる八半檀家・八入墓制などの民俗慣行から—」『岡正雄教授古稀記念論文集・民族学からみた日本』、一一五—一三四頁
- 中込睦子(一九八三)「福島県下における八オヤジマイノ慣行—家族成員権の移行と親族ネットワーク」『民族学研究』四八巻二号、一四六—一七四頁
- 中野 卓(一九五八)「家と基礎的な家連合」『日本社会要論』三七—六九頁
- 中野 卓(一九六七)「家・同族と先祖の観念」『シンポジウム・祖先観と社会構造』一〇—一八頁
- NEWELL, W. H. (一九七六) *Ancestors, Mouton*
- 大間知篤三(一九五〇)「家の類型」『民間伝承』一四巻二二号、四—九頁
- SMITH, R. (一九七四) *Ancestor Worship in Contemporary Japan* Stanford Univ. Press
- 鈴木栄太郎(一九四〇)『日本農村社会学原理』
- 高橋博子(一九七五)「家族形態と先祖祭祀」『家族研究年報』一、三七—五頁
- 竹田聰洲(一九五七)『祖先崇拜』、平楽寺書店
- 竹田聰洲(一九七四)「日本の『家』とその信仰」『社会科学』一六、一—二四頁
- 上野和男(一九七八)「奄美大島管鈍における家族の変化」『人類科学』三〇、四五—七〇頁
- 上野和男(一九八二)「日本の祖名継承法と家族—祖先祭祀と家族類型についての一試論—」『政経論叢』五一巻五/六号、七七—一二三頁
- 上野和男(一九八三)「奄美の社会構造」『奄美の神と村』、七—二三頁
- 上野和男(一九八四)「大家族・小家族・直系家族—日本の家族研究の三つの系譜—」『社会人類学年報』一〇、二九—五〇頁
- 上野和男(一九八五)「日本の位牌祭祀と家族—祖先祭祀と家族類型についての一考察—」『国立歴史民俗博物館研究報告』六、一七三—二四九頁
- 上野和男(一九八七)「新しい家族研究の表象—森岡清美『家の変貌と先祖の祭』の位置—」『列島の文化史』四、一五六—一五八頁
- 牛島 巖(一九六六)「ハイハイノ祭祀と日本の家族—伊豆諸島・利島を中心として—」『民族学研究』三一巻三号、一六九—一七八頁
- 牛島 巖(一九七六)「与論島社会のハイハイノ祭祀と家族—朝戸部落の事例を中心に—」『古代中世の社会と民俗文化』、七二—七四頁
- 柳田国男(一九四六)『先祖の話』
- 米村昭二(一九七四)「同族をめぐる諸問題—家、同族と祖先崇拜との関連を主として—」『社会学評論』九七、一八—三九頁
- 米村昭二(一九八一)「現代日本人の先祖観と先祖祭祀」『現代人と宗教』(ジュリスト総合特集二)、一五一—一五六頁
- 吉田 孝(一九八三)『律令国家と古代社会』、岩波書店
- 義江明子(一九八六)『日本古代の氏の構造』、吉川弘文館
- (国立歴史民俗博物館民俗研究部)

Ancestor Worship and Family : An Introduction

UENO Kazuo

Recently, especially since the 1970s, there has been much activity in the study of various aspects of ancestor worship, including the fields of social anthropology, Japanese folklore, sociology, and the study of religion. Before 1970, as can be seen in the African studies by Fortes, M., studies were mainly on the relationship between unilineal descent groups and ancestor worship. In Japan, studies during the same period centered around the family organization or "Ie", which is a unilineal descent group, and ancestor worship. However, after 1970, the relationship between kinship organization, which is not a unilineal descent group, and ancestor worship, became a matter of growing interest.

The primary condition promoting this active research into ancestor worship was the appearance of a kind of socially problematic situation, regarding how Japanese society conducts ancestor worship today, as is symbolized in the "family Buddhist altar boom" and the "grave boom". The second condition was the fact that researchers into family came to tackle the question of how to evaluate the post-war changes in the Japanese family, and that the research into ancestor worship is considered to have much meaning in the approach to this subject. The third condition was that a new development in research into family is now required with regard to aspects of ceremonial worship, as opposed to the corroborative studies on Japanese families and kinship, which started in earnest at the beginning of the Showa era, in which the family was long considered as a labor organization, that is, an economic unit.

Present studies on ancestor worship, especially this joint study on "Family, Kinship, and Ancestor Worship", may be considered to be faced by the following questions: first, regional difference in Japanese ancestor worship should be clarified to begin with; second, long- and short-term changes in Japanese ancestor worship should be clarified. Third, the question of how the various types of ancestor worship are related to Japanese concepts of the dead and the Other World should be addressed; fourth, the position of Japanese ancestor worship in Eastern Asia should be clarified. The subject of this joint study is the clarification of ancestor worship as one of the Japanese basic faiths from an overall consideration of the subject at the present stage, from the aspects of both social structure and concepts regarding ancestors.